平家物語

源氏との最後の決戦で平家の敗北が決定的となり、❶安徳天皇は❷入水する。母である❸建礼門院も後を追って海に入るが、源氏の武士に髪を熊手に引っかけられ、救出された。平家一門の武将たちは、次々と海中に沈んでいった。

能登殿の最期

およそ❹能登守教経の矢先に回る者こそなかりけれ。矢だねのあるほど射つくして、今日を最後とや思はれけん、赤地の❺錦の直垂に、❻唐綾をどしのよろひ着て、❼いかものづくりの大太刀抜き、❽白柄の大長刀の鞘をはづし、左右に持つてなぎ回りたまふに、面を合はする者ぞなき。多くの者ども討たれにけり。❾新中納言使者を立てて、「能登殿、いたう罪な作りたまひそ。さりとてよき敵か。」とおっしゃったので、「それでは大将❿大将軍に組めというのだな。」と理解して、武器れば、さては⓫打ち物茎を短く持って、源氏の舟に次々と乗り移って、大声で叫んで攻め戦う。教経は判官短かに取つて、源氏の舟に乗り移り乗り移り、で攻め戦ふ。⓬判官を見知りたまはねば、⓭物具のよき武者を判官かと目をかけて、はせ回る。判官も先に心得て、面に立つやうにはしけれども、とかく違ひて、能登殿には組まれず。されどもいかがしたりけん、判官の舟に乗り当たつて、あはやと目をかけて飛んでかかるに、判官かなはじとや思はれけん、長刀脇にかい挟み、味方の舟の二丈ばかりのいたりけるに、ゆらりと飛び乗りたまひぬ。能登殿は、

総じて能登守教経の矢の前に立ち回る者はいなかった。教経は、用意した矢のあるだけを射つくして、今日を最後とお思いになったのであろうか、赤地の錦の直垂の上に、唐綾おどしのよろいを着て、いかめしいつくりの大太刀を抜き、白木の柄の大長刀の鞘をはずし、左右の手に持ってなぎ払い回られると、まともに立ち向かう者はいない。多くの者たちが討たれたのであった。新中納言が使者を出して、「能登殿よ、余り罪をおつくりになるな。そんなことをしたとしてふさわしい敵であろうか。」とおっしゃったので、「それでは大将軍に組めというのだな。」と理解して、武器の柄を短く持って、源氏の舟に次々と乗り移って、大声で叫んで攻め戦う。教経は判官を見知っていらっしゃらないので、立派な武具の武士を判官かと目をつけて、駆け回る。判官も先に気づいて、前に立つようにはしたが、あれこれと行き違うようにして、能登殿にはお組みにならない。けれどもどうしたのであろうか、判官の舟に乗り当たって、「やあ。」と判官目がけて飛びかかると、判官はかなわないとお思いになったのであろうか、長刀を脇に挟み、味方の舟で二丈ほど離れていた舟に、ひらりと飛び移りなさった。能登

早業や劣られたりけん、やがて続いても飛びたまはず。今はかうと思はれければ、太刀・長刀海へ投げ入れ、かぶとも脱いで捨てられけり。よろひの⑮草摺かなぐり捨て、⑯胴ばかり着て、⑰大童になり、大手を広げて立たれたり。およそあたりをはらつてぞ見えたりける。恐ろしなんどもおろかなり。能登殿大音声をあげて、「我と思はん者どもは、寄つて教経に組んで生け捕りにせよ。鎌倉へ下つて、⑱頼朝に会うて、ものひと言言はんと思ふぞ。寄れや寄れ。」とのたまへども、寄る者一人もなかりけり。

ここに、⑲土佐国の住人、⑳安芸郷を知行しける安芸大領実㉒康が子に、安芸太郎実光とて、三十人が力持つたる大力の剛の者あり。我にちつとも劣らぬ㉓郎等一人、弟の次郎も普通には優れたるしたたか者なり。安芸太郎、能登殿を見たてまつて申しけるは、「いかに猛うましますとも、我ら三人取りついたらんに、たとひ丈十丈の鬼なりとも、などか従へざるべき。」とて、主従三人小舟に乗つて、能登殿の舟に押し並べ、「えい。」と言ひて乗り移り、㉔かぶとの鍬を傾け、太刀を抜いて一面に討つてかかる。能登殿ちつとも騒ぎたまはず、真つ先に進んだる安芸太郎が郎等を、裾を合はせて海へどうど蹴入れたまふ。続いて寄る安芸太郎を㉕弓手の脇に取つて挟み、弟の次郎をば㉖馬手の脇にかい挟み、ひと締め締めて、「㉗いざうれ、さらばおのれら、死途の山の供せよ。」とて、生年二十六にて海へつつとぞ入りたまふ。(※1)

新中納言、「見るべきほどのことは見つ。今は自害せん。」とて、㉘乳母子の㉙伊賀平内左衛門家長を召して、「いか殿は、早業では劣っておられたのだろうか、すぐに続いてもお飛びにならない。今はもうこれまでだと思われたので、太刀・長刀を海へ投げ入れ、かぶとも脱いでお捨てになった。よろいの草摺を強く引っぱって捨て、胴だけ着て、ざんばら髪になり、大きく手を広げてお立ちになった。総じて威厳があって周りを圧倒するように見えた。恐ろしいなどという言葉では言いつくせない。能登殿は大声をあげて、「我こそはと思う者どもは、寄って教経に組んで生け捕りにせよ。鎌倉へ下って、頼朝に会って、なにかひと言言おうと思うのだ。寄って来い、寄って来い。」とおっしゃるが、近寄る者は一人もいなかった。

ところで土佐の国の住人で、安芸の郷を支配していた安芸大領実康の子に、安芸太郎実光といって、三十人分の力をもった大力の武勇に優れた者がいた。自分に少しも劣らない家来が一人おり、弟の次郎も普通の人以上に武勇に優れた者である。安芸太郎が能登殿を見申しあげて申すには、「どんなに勇猛でいらっしゃっても、我ら三人が取りついたら、たとえ背丈が十丈の鬼でも、どうして従えられないことがあろうか。」と言って、主従三人が小舟に乗って、能登殿の船に押し並べ、「えい。」と言って乗り移り、かぶとの鍬を傾け、太刀を抜いていっせいに討ってかかった。能登殿は少しもお騒ぎにならず、真っ先に進んだ安芸太郎の家来を、裾が触れ合うほど引き寄せて海へどぶんと蹴り入れなさった。続いて寄る安芸太郎を左手の脇に挟み、弟の次郎を右手の脇に挟み、ぐっとひと締め締めつけて、「さあ、それならおまえたちは、死出の山の供をせよ。」と言って、年齢は二十六で海へつつっとお入りになった。

新中納言は、「見届けるべきことは見届けた。今となっては自害しよう。」と言って、

に、約束は違ふまじきか。」とのたまへば、「子細にや及び候ふ。」と、中納言によろひ二領着せたてまつり、わが身もよろひ二領着て、手を取り組んで海へぞ入りにける。これを見て、侍ども二十余人後れたてまつらじと、手に手を取り組んで、一所に沈みけり。その中に越中次郎兵衛、上総五郎兵衛、悪七兵衛、飛騨四郎兵衛は、なにとしてか逃れたりけん、そこをもまた落ちにけり。海上には赤旗、赤印投げ捨て、かなぐり捨てたりければ、竜田川の紅葉葉を嵐の吹き散らしたるがごとし。みぎはに寄する白波も、薄紅にぞなりにける。主もなきむなしき舟は、潮に引かれ、風に従つて、いづくをさすともなく揺られゆくこそ悲しけれ。

〈出典『新編日本古典文学全集46』（小学館、一九九四年）〉

乳母子の伊賀平内左衛門家長をお呼びになって、「どうだ、約束どおりにするつもりか。」とおっしゃると、「こまごまと申すまでもありません。」と、新中納言によろい二領をお着せ申しあげ、自分もよろい二領を着て、手を取り組んで海へ入ったのだった。これを見て、侍たち二十余人が主君に後れ申すまいと、手に手を取り組んで、同じ場所で海に沈んだ。そんな中で、越中次郎兵衛盛嗣、上総五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清、飛騨四郎兵衛は、どうして逃れたのだろうか、そこもまた逃げ落ちてしまった。海上には平氏の赤旗や赤印が投げ捨て、乱暴に捨ててあったので、竜田川の紅葉の葉を嵐が吹き散らしたかのようである。水ぎわに打ち寄せる白波も、薄紅になってしまった。主人もいない空っぽの舟は、潮に引かれ、風に吹かれて、どこを目指すともなく揺られて行くのは悲しいことであった。

【注】

❶**安徳天皇**　［1178-1185］　第八十一代天皇。
❷**人水**　自ら命を絶つために、海や川に入ること。
❸**建礼門院**　生没年不詳。平安時代後期から鎌倉時代の人。父は平清盛。
❹**能登守教経**　［1160-1185］　平教経。清盛の甥。
❺**錦の直垂**　「錦」は、金色や銀色の糸を織り込んだ絹織物。「直垂」は、よろいの下に着込んだ衣服のこと。
❻**唐綾をどしのよろい**　中国から渡来した絹織物（綾）を細長く裁ち、芯に麻を入れておどしに使ったよろい。
❼**いかものづくりの大太刀**　いかめしく立派に見えるように造った太刀。
❽**白柄**　木地のまま、飾りや補強をせずに仕立てたもの。
❾**新中納言**　平知盛。［1152-1185］　清盛の子。
❿**大将軍**　合戦で全軍の指揮・統率をする主要な大将。
⓫**打ち物**　太刀や長刀のように、鉄を打ち鍛えて造った武器。
⓬**判官**　源義経のこと。［1159-1189］
⓭**物具**　武器。特に、よろいやかぶと、弓矢などの武具。
⓮**二丈**　一丈は約三メートル。
⓯**草摺**　よろいの胴の下に垂らした部分。
⓰**胴**　よろいの胴を覆う部分。
⓱**大童**　頭の上で束ねていた髪が解けて、子供の髪のようにばらばらになったさま。
⓲**頼朝**　源頼朝。［1147-1199］
⓳**土佐国**　旧国名。現在の高知県。
⓴**安芸郷**　現在の高知県安芸市の辺り。
㉑**知行**　土地を領有して支配すること。
㉒**大領**　郷の長官。
㉓**郎等**　家来。
㉔**かぶとの鍬**　かぶとの左右、後ろに垂れた部分。首を守る。
㉕**弓手**　左手。
㉖**馬手**　右手。
㉗**いざうれ**　さあ。
㉘**乳母子**　ここでは、養育係の子のこと。
㉙**伊賀平内左衛門家長**　伊賀の国（現在の三重県）出身の武士。
㉚**子細にや及び候ふ**　こまごまと申すまでもありません。
㉛**二領**　「領」は、よろいを数える単位。
㉜**越中次郎兵衛**　平盛嗣。平家の武将。
㉝**上総五郎兵衛**　藤原忠光。平家の武将。
㉞**悪七兵衛**　藤原景清。忠光の弟。平家の武将。
㉟**飛騨四郎兵衛**　不詳。飛騨守景家の子か。
㊱**赤旗**　平家の旗。源氏は白旗を使った。
㊲**竜田川**　現在の奈良県生駒郡を流れる川。紅葉の名所。
㊳**みぎわ**　水ぎわ。

※1「モウ」または「マウ」と読む。
※2「タゴウ」または「タガウ」と読む。